

## 30円連合葉書の自然な使用例

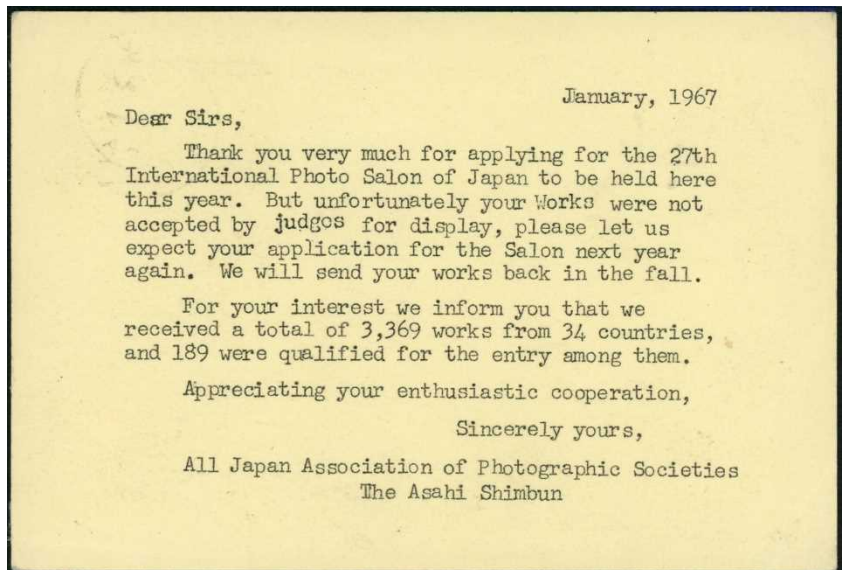
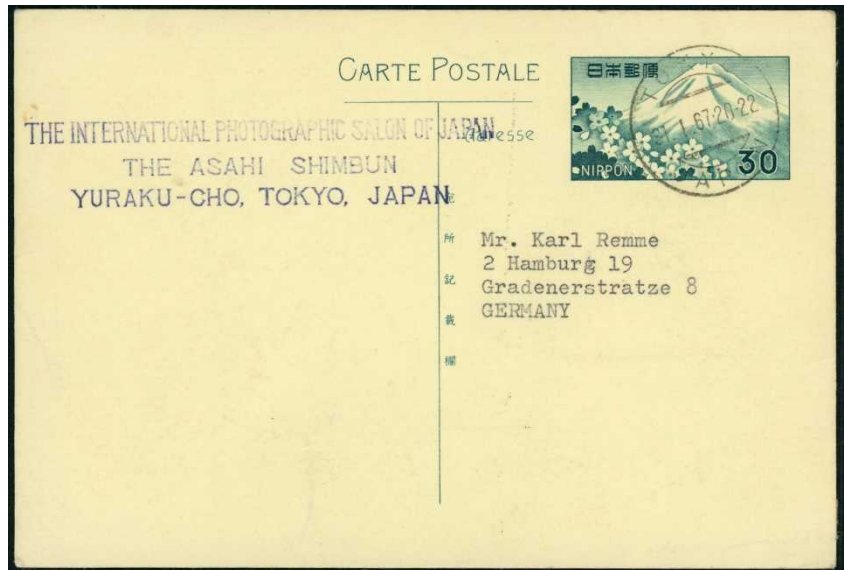
永吉 秀夫

外国あての葉書料金は、今では航空便料金(70円)が全世界共通となりました。船便料金60円(国内便より安い!)も一応は定められていますが、もはや利用者はほとんどないようで、60円額面の外信葉書は販売されていません。戦後、昭和40年代あたりから、船便葉書の使用例を見つけるのは難しくなります。切手商の店頭やオークションで見かけるのは収集家が作成した収集用郵便ばかりで、通信面が真っ白というのも少なくありません。

そんな中で今回の紹介品は、昭和42年(1967年)に差し出された30円富士山葉書の「まともな使用例」です。差出人名として、朝日新聞社「国際写真サロン」のゴム印が押されています。

通信面の写真も載せておきましょう。今回は3369点の応募写真がありました。残念ながらあなたの写真は選外となりました。来年またどうぞというお知らせです。この文面は印刷でなくタイプ打ちのようです。ミスタイプの上に重ね打ちしている部分が1箇所あります。

この種の郵便は急ぐものでないので、まあ船便の利用価値もありました。宛先はドイツなので、当時の航空葉書料金は55円です。その半額近い料金で送ることができたというわけですね。



TOKYO 1967.1.31 → ドイツ